ワクチン接種後 腕以外に発疹

新型コロナの免疫あり？

高知大・佐野教授ら研究

新型コロナウイルスワクチンを接種した後、数日間にわたって太ももや脇腹などに発疹が出るケースがまれにある。この発疹のメカニズムについて、高知大学医学部皮膚科学講座の佐野栄紀（さのひでとし）教授らのチームが研究を進めている。「接種後に体の広い範囲で発疹が出るのは、過去にコロナに感染し、既に免疫を持っている証拠かもしれない」という。

佐野教授によると、4月に1回目の優先接種を受けた幡多地域の50代女性が、太ももや脇腹などにじんましんのような小さな赤い発疹が出たため、接種6日後に幡多けんみん病院を受診した。

女性の症状は軽く、入院せずに治療して1週間ほどで回復した。2回目の接種は受けなかったという。

ワクチンを接種した女性の太ももに出た発疹（佐野栄紀教授提供）

発疹が出た皮膚の一部を採取して検査すると、血管内に微小な血栓（血の塊）が確認された。これは一般的なじんましんやウイルス性の発疹では見られず、新型コロナに感染した際の皮膚症状とよく似ているという。

コロナに感染すると、肺炎だけでなく、しもやけやじんましんのような皮膚症状が出ることが国内外で報告されている。佐野教授によると、感染によって過剰な免疫反応が起こって血栓ができやすくなり、皮膚の血流が悪化して症状を引き起こすとされる。

一方、コロナワクチンの副反応（ふくはんのう）としては、発熱や倦怠（けんたい）感などが報告されているが、血栓を伴う皮膚症状は「通常は起こりえない」という。

そのため、佐野教授は「ワクチン接種後に微小な血栓ができたということは、体内に存在している免疫が反応したということ。この女性は以前コロナに感染し、既に免疫を持っていた可能性が高い」と推測する。「1回目の接種後、全身に広がる皮膚症状が4、5日続く人は2回目を打たなくてよいかもしれない」と話す。

ワクチン接種後、どのくらいの頻度で皮膚症状が出るのかは分かっていないというが、佐野教授は「注射した腕以外に何らかの皮膚症状が出た場合は、自分で判断せず、近くの皮膚科専門医に相談を」と助言している。

この研究は、幡多けんみん病院の大沢梨佐副医長、高知県立大の池田光徳教授らと共同で実施。研究成果をまとめた論文は6月、日本研究皮膚科学会のオンライン雑誌に掲載された。

（山本 仁）